

有る人予に問うて云はく、世間の道俗させる法華經の文義を弁へずとも、一部・一卷・四要品・自我偈・一句等を受持し、或は自らもよみかき、若しは人をしてもよみかゝせ、或は我とよみかゝざれども經に向かひ奉り、合掌礼拝をなし、香華を供養し、或は上の如く行ずる事なき人も、他の行ずるを見てわづかに隨喜の心をこし国中に此の經の弘まれる事を悦ばん。是体の僅かの事によりて世間の罪にも引かれず、彼の功德に引かれて小乗の初果の聖人の度々人天に生まれて、而も悪道に墮ちざるがごとく、常に人天の生をうけ、終に法華經を心得るものと成って十方淨土にも往生し、又此の土に於ても即身成仏する事有るべきや、委細に之を聞かん。答へて云はく、させる文義を弁へたる身にはあらざれども、法華經・涅槃經並びに天台・妙樂の積の心をもて推し量るに、かりそめにも法華經を信じて聊も謗を生ぜざらん人は、余の惡にひかれて惡道に墮つべしとはおぼえず。但し惡知識と申してわづかに權教を知れる人、智者の由をして法華經を我等が機に叶ひ難き由を和らげ申さんまことと申ひて、法華經を隨喜せし心を打ち捨て余教へ移りはてゝ、一生さて法華經へ歸り入らざらん人は、惡道に墮つべき事も有らん。

仰せに付いて疑はしき事侍り。實にてや侍るらん、法華經に説かれて候とて智者の語らせ給ひしは、昔三千塵点劫の当初大通智勝仏と申す仏います。其の仏の凡夫にていましける時十六人の王子をはします。彼の父の王仏にならせ給ひて、一代聖教を説き給ひき。十六人の王子も亦出家して其の仏の御弟子とならせ給ひけり。大通智勝仏法華經を説き畢らせ給ひて定に入らせ給ひしかば、十六人の王子の沙弥其の前にしてかはるがはる法華經を講じ給ひけり。其の所説を聴聞せし人幾千万といふ事をしらず、当座に悟りをえし人は不退の位に入りき。又法華經をおろかに心得る結縁の衆もあり、其の人々当座中間に不退の位に入らずして三千塵点劫をへたり。其の間又つぶさに六道四生に輪回し、今日釈迦如来の法華經を説き給ふに不退の位に入る。所謂舍利弗・目連・迦葉・阿難等是なり。猶々信心薄き者は、當時も覺らずして未來無数劫を経べきか。知らず、我等も大通智勝仏の十六人の結縁の衆にもあるらん。此の結縁の衆をば天台・妙樂は名字・觀行の位にかなひたる人なりと定め給へり。名字・觀行の位は一念三千の義理を弁へ、十法成乘の觀を凝らし、能く能く義理を弁へたる人なり。一念隨喜五十展轉と申すも、天台・妙樂の積のごときは、皆觀行五品の初隨喜の位と定め給へり。博地の凡夫の事にはあらず。然るに我等は末代の一字一句等の結縁の衆、一分の義理をも知らざらんは、豈無量の世界の塵点劫を経ざらんや。是偏に理深解微の故に、教は至って深く、機は實に浅きがいたす處なり。只弥陀の名号を唱へて、順次生に西方極樂世界に往生し、永く不退の無生忍を得て、阿弥陀如来・觀音・勢至等の法華經を説き給はん時、聞いて悟りを得んには如かじ。然るに弥陀の本願は有智無智・善人惡人・

持戒破戒等をも<sup>えら</sup>扱はず。只一念に唱ふれば臨終に必ず<sup>ただ</sup>弥陀如来本願の故に<sup>らいごう</sup>来迎し給ふ。是を以て思ふに、此の土にして法華經の結縁を捨て浄土に往生せんと<sup>思</sup>をもふは、億千世界の塵点を経ずして疾く法華經を悟らんがためなり。法華經の根機にあたはざる人の、此の穢土にて法華經にいとまをいれて一向に念仏を申さゞるは、法華經の証は取り難く、極楽の業は定まらず、<sup>ちゅうげん</sup>中間になりて中々法華經をおろそかにする人にてやおはしますらんと申し侍るは如何に。其の上只今承り候へば、僅かに法華經の結縁計りならば、三惡道に墮ちざる計りにてこそ候へ、六道の生死を出づるにはあらず。念仏の法門はなにと義理を知らざれども、弥陀の名号を唱へ奉れば浄土に往生する由を申すは、遙かに法華經よりも弥陀の名号はいみじくこそ聞こえ侍れ。答へて云はく、誠に仰せめでたき上、智者の御物語にて侍るなれば、さこそと存じ候へども、但し若し御物語の如く侍らば、すこし不審なる事侍り。大通結縁の者をあらあらうちあてがひ申すには、名字・觀行の者とは釈せられて侍れども、正しく名字即の位の者と定められ侍る上、<sup>たいたいしゅしょう</sup>退大取小の者として法華經をすて、權教にうつり、後には惡道に墮ちたりと見えたる上、<sup>まさ</sup>正しく法華經を誹謗して之を捨てし者なり。設ひ義理を知るやうなる者なりとも、謗法の人にあらん上は、三千塵点・無量塵点も<sup>ふ</sup>経べく侍るか。五十展転一念隨喜の人々を觀行初隨喜の位の者と釈せられたるは、末代の我等が隨喜等は彼の隨喜の中には入るべからずと仰せ候か。是を天台・妙樂初隨喜の位と釈せられたりと申さるゝほどにては、又名字即と釈せられて侍る釈はすてらるべきか。<sup>しよせん</sup>所詮仰せの御義を委しく案ずれば、をそれにては候へども、謗法の一分にやあらんずらん。其の故は法華經を我等末代の機に叶ひ難き由を仰せ候は、末代の一切衆生は穢土にして法華經を行じて<sup>せん</sup>詮無き事なりと仰せらるゝにや。若し<sup>左</sup>さやうに侍らば、末代の一切衆生の中に此の御<sup>ことば</sup>詞を聞いて、既に法華經を信ずる者も打ち捨て、未だ行ぜざる者も行ぜんと思ふべからず。隨喜の心も留め侍らば謗法の分にやあるべかるらん。<sup>も</sup>若し謗法の者に一切衆生なるならば、いかに念仏を申させ給ふとも、御往生は不定にこそ侍らんずらめ。又弥陀の名号を唱へ、極楽世界に往生をとぐべきよしを仰せられ侍るは何なる經論を証拠として此の心はつき給ひけるやらん。<sup>まさ</sup>正しくつよき証文候か。若しなくば其の義たのもしからず。前に申し候ひつるがごとく法華經を信じ侍るは、させる解なけれども三惡道には墮つべからず候。六道を出づる事は一分のさとりなからん人は有り難く侍るか。但し惡知識に値ひて法華經隨喜の心を云ひやぶられて候はんは力及ばざるか。

又仰せに付いて驚き<sup>おほ</sup>覚え侍り。其の故は法華經は末代の凡夫の機に<sup>かな</sup>叶ひ難き由を智者申されしかば、<sup>左</sup>さかと思ひ侍る処に、只今の仰せの如くならば、弥陀の名号を唱ふとも法華經をいゝうとむるとがによりて往生をも遂げざる上、惡道に墮つべきよし承るは、ゆゝしき大事にこそ侍れ。<sup>そもそも</sup>抑大通結縁の者は謗法の故に六道に回るも又名字即の浅位の者なり。又一念隨喜五十展転の者も又名字觀行即の位と申す釈は何れの処に候やらん、委しく承り候はゞや。又義理をも知らざる者の僅かに法華經を信じ侍るが、惡知識の教によて法華經を捨て權教に移るより外の、世間の惡業に引かれては惡道に墮つべか

らざる由申さるゝは証拠あるか。又無智の者の念仏申して往生すると何に見えてあるやらんと申し給ふこそよに事あたらしく侍れ。双観經等の浄土の三部經・善導和尚等の經釈に明らかに見えて侍らん上は、なにとか疑ひ給ふべき。答へて曰く、大通結縁の者を退大取小の謗法、名字即の者と申すは私の義にあらず。天台大師の文句第三の巻に云はく「法を聞いて未だ度せず、而して世々に相値ひて今に声聞地に住する者有り。即ち彼の時の結縁の衆なり」と釈し給ひて侍るを、妙樂大師の疏記第三に、重ねて此の釈の心を述べ給ひて云はく「但し未だ品に入らず俱に結縁と名づくるが故に」文。文の心は大通結縁の者は名字即の者となり。又天台大師の玄義の第六に大通結縁の者を釈して云はく「若しは信若しは謗、因って倒れ因って起く。喜根を謗ずと雖も後要ず度を得るが如し」文。文の心は大通結縁の者の三千塵点劫を経るは謗法の者なり。例せば勝意比丘が喜根菩薩を謗ぜしが如しと釈す。五十展転の人は五品の初めの初随喜の位と申す釈もあり。又初随喜の位の先の名字即と申す釈もあり。疏記第十に云はく「初めに法会にして聞く、是れ初品なるべし。第五十人は必ず随喜の位の初めに在る人なり」文。文の心は初会聞法の人には必ず初随喜の位の内、第五十人は初随喜の位の先の名字即と申す釈なり。其の上五種法師にも受持・読・誦・書写の四人は自行の人、大經の九人の先の四人は解無き者なり。解説は化他、後の五人は解有る人と証し給へり。疏記第十に五種法師を釈するには「或は全く未だ品に入らず」と。又云はく「一向未だ凡位に入らず」文。文の心は五種法師は觀行五品と釈すれども、又五品已前の名字即の位とも釈するなり。此等の釈の如くんば義理を知らざる名字即の凡夫が随喜等の功德も、經文の一偈一句一念随喜の者、五十展転等の内に入るかと覚え候。何に況んや此の經を信ぜざる謗法の者の罪業は譬喩品に委しくとかれたり。持經者を謗ずる罪は法師品にとかれたり。此の經を信ずる者の功德は分別功德品・随喜功德品に説けり。謗法と申すは違背の義なり。随喜と申すは随順の義なり。させる義理を知らざれども、一念も貴き由申すは違背・随順の中には何れにか取られ候べき。又末代無智の者のわづかの供養随喜の功德は經文に載せられざるか如何。其の上天台・妙樂の釈の心は、他の人師ありて法華經の乃至童子戲・一偈一句・五十展転の者を、爾前の諸經のごとく上聖の行儀と釈せられたるをば謗法の者と定め給へり。然るに我が釈を作る時、機を高く取りて末代造惡の凡夫を迷はし給はんは自語相違にあらずや。故に妙樂大師、五十展転の人を釈して云はく「恐らくは人謬りて解せる者初心の功德の大なることを測らず、而して功を上位に推りて此の初心を蔑る故に、今彼の行浅く功深きことを示して以て經力を顯はす」文。文の心は謬って法華經を説かん人の、此の經は利智精進上根上智の人のためといはん事を仏をそれて、下根下智末代の無智の者の、わづかに浅き随喜の功德を、四十余年の諸經の大人上聖の功德に勝れたる事を顯はさんとして五十展転の随喜は説かれたり。故に天台の釈には、外道・小乘・權大乘までたくらべ来たって、法華經の最下の功德が勝れたる由を釈せり。所以に阿闍多仙人は十二年が閻恒河の水を耳に留め、耆兔仙人は一日の中に大海の水をすいほす。此くの如き得通の仙人は、小乘阿含經の三賢の浅位の一通もなき

凡夫には百千万倍劣れり。三<sup>みよ</sup>明六通を得たりし小乗の舍利弗目連等は、華嚴・方等・般若等の諸大乘經の未断三惑の一通もなき一偈一句の凡夫には百千万倍劣れり。華嚴・方等・般若經を習ひ極めたる等覺の大菩薩は、法華經を僅かに結縁をなせる未断三惑無惡不造の末代の凡夫には百千万倍劣れる由、釈の文顯然なり。而るを当世の念仏宗等の<sup>けんねん</sup>人、我が身の權教の機にて實教<sup>じつぎょう</sup>を信ぜざる者は、方等・般若の時の二乗のごとく、自身をはぢしめてあるべき処に敢へて其の義なし。あまつさへ世間の道俗の中に、僅かに觀音品・自我憍<sup>たまたま</sup>などを読み、適父母孝養などのために一日經等を書く事あれば、いゝさまたげて云はく、善導和尚は念仏に法華經をまじふるを雜行と申し、百の時は希に一・二を得、千の時は希に三・五を得ん。乃至千中無一と仰せられたり。何に況んや智慧第一の法然上人は法華經等を行ずる者をば、祖父の履、或は群賊等にたとへられたりなどいゝうとめ侍るは、是くの如く申す師も弟子も阿鼻の焰をや招かんずらんと申す。

問うて云はく、何なるすがた並びに語<sup>ことば</sup>を以てか、法華經を世間いゝうとむる者には侍るや、よにおそろしくこそおぼえ候へ。答へて云はく、始めに智者の申され候と御物語候ひつるこそ、法華經をいゝうとむる惡知識の語にて侍れ。末代に法華經を失ふべき者は、心には一代聖教を知りたりと思ひて而も心には權實二經を弁<sup>わきま</sup>へず。身には三衣一鉢を帶し、或は阿練若に身をかくし、或は世間の人にいみじき智者と思はれて、而も法華經をよくよく知る由を人に知られな<sup>ね</sup>んとして、世間の道俗には三<sup>みよ</sup>明六通の阿羅漢の如く貴ばれて法華經を失ふべしと見えて候。

問うて云はく、其の証拠如何。答へて云はく、法華經勸持品に云はく「諸の無智の人、惡口罵詈等し及び刀杖を加ふる者有らん。我等皆當に忍ぶべし」文。妙樂大師此の文の心を釈して云はく「初めの一行は通じて邪人を明かす。即ち俗衆なり」文。文の心は此の一行は在家の俗男俗女が權教の比丘等にかたはられて敵をすべしとなり。經に云はく「惡世の中の比丘は邪智にして心諂曲に、未だ得ざるを為れ得たりと謂ひ我慢の心充滿せん」文。妙樂大師此の文の心を釈して云はく「次の一行は道門増上慢の者を明かす」文。文の心は惡世末法の權教の諸の比丘、我法を得たりと慢じて法華經を行ずるもの、敵となるべしといふ事なり。經に云はく「或は阿練若に納衣にして空閑に在って自ら真の道を行ずと謂ひて人間を輕賤するもの有らん。利養に貪著するが故に白衣の与に法を説き、世に恭敬せらるゝこと六通の羅漢の如くならん。是の人惡心を懷き、常に世俗の事を念ひ、名を阿練若に仮りて好んで我等が過を出ださん。而も是くの如き言<sup>ことば</sup>を作さん、此の諸の比丘等は利養を貪るを為ての故に外道の論議を説き、自ら此の經典を作りて世間の人を誑惑す。名聞を求むるを為ての故に分別して是の經を説く。常に大衆の中に在りて我等を毀らんと欲するが故に、国王・大臣・婆羅門・居士及び余の比丘衆に向かつて、誹謗して我が惡を説いて是邪見の人、外道の論議を説くと謂はん」已上。大師此の文を釈して云はく「三に七行は僭聖増上慢の者を明かす」文。經並びに釈の心は、惡世の中に多くの比丘有<sup>ね</sup>って身には三衣一鉢を帶し、阿練若に居して、行儀

は大迦葉等の三明六通の羅漢のごとく、在家の諸人にあふがれて、一言を吐けば如来の金言のごとくをもはれて、法華經を行ずる人をいゝやぶらんがために、国王大臣等に向かひ奉りて、此の人は邪見の者なり、法門は邪法なりなんどいゝうとむるなり。上の三人の中に、第一の俗衆の毀りよりも、第二の邪智の比丘の毀は猶しのびがたし。又第二の比丘よりも、第三の大衣の阿練若の僧は甚し。此の三人は当世の權教を手本とする文字の法師、並びに諸經論の言語道斷の文を信ずる暗禪の法師、並びに彼等を信ずる在俗等、四十余年の諸經と法華經との權実の文義を弁へざる故に、華嚴・方等・般若等の心仏衆生・即心是仏・即往十方西方等の文と、法華經の諸法実相・即往十方西方の文と語の同じきを以て義理のかはれるを知らず、或は諸經の言語道斷・心行所滅の文を見て、一代聖教には如来の实事をば宣べられざりけりなんどの邪念をおこす。故に悪鬼此の三人に入って末代の諸人を損じ国土をも破るなり。故に經文に云はく「濁劫悪世の中には多く諸の恐怖有らん、悪鬼其の身に入って我を罵詈訶毀辱せん、乃至仏の方便隨宜所説の法を知らず」文。文の心は濁悪世の時、比丘、我が信ずる所の教は仏の方便隨宜の法門ともしらずして、權実を弁へたる人出来すれば、罵り破しなんどすべし。是偏に悪鬼の身に入りたるをしらずと云ふなり。

されば末代の愚人の恐るべき事は、刀杖・虎狼・十悪・五逆等よりも、三衣一鉢を帯せる暗禪の比丘と並びに權教の比丘を貴しと見て実教の人をにくまん俗侶等なり。故に涅槃經二十二に云はく「悪象等に於ては心に恐怖すること無かれ。悪知識に於ては怖畏の心を生ぜよ。何を以ての故に、是の悪象等は唯能く身を壞りて心を壞ること能はず。悪知識は二俱に壞るが故に。乃至悪象の為に殺されては三趣に至らず、悪友の為に殺されては必ず三趣に至らん」文。此の文の心を章安大師宣べて云はく「諸の悪象等は但是悪縁にして人に悪心を生ぜしむること能はず、悪知識は甘談詐媚・巧言令色もて人を牽いて悪を作さしむ。悪を作すを以ての故に人の善心を破る。之を名づけて殺と為す、即ち地獄に墮す」文。文の心は、悪知識と申すは甘くかたらひ詐り媚び言を巧みにして愚癡の人の心を取って善心を破るといふ事なり。総じて涅槃經の心は、十悪・五逆の者よりも謗法・闡提のものをおそるべしと誡めたり。闡提の人と申すは法華經・涅槃經を云ひうとむる者と見えたり。当世の念仏者等法華經を知り極めたる由をいふに、因縁譬喩をもて釈し、よくよく知る由を人にしられて、然して後には此の經のいみじき故に末代の機のおろかなる者及ばざる由をのべ、強き弓重き鎧、かひなき人の用にたゞざる由を申せば、無智の道俗さもと思ひて實には叶ふまじき權教に心移して、僅かに法華經に結縁しぬるをも翻し、又人の法華經を行ずるをも隨喜せざる故に、師弟俱に謗法の者となる。之に依つて謗法の衆生国中に充滿して、適仏事をいとなみ、法華經を供養し、追善を修するにも、念仏等を行ずる謗法の邪師の僧來たつて、法華經は末代の機に叶ひ難き由を示す。故に施主も其の説を實と信じてある間、訪らはるゝ過去の父母・夫婦・兄弟等は彌地獄の苦を増し、孝子は不孝、謗法の者となり、聽聞の諸人は邪法を隨喜し悪魔の眷屬となる。日本国中の諸人は仏法を行ずるに似て仏法を行ぜず。適

仏法を知る智者は、国の人に捨てられ、守護の善神は法味をなめざる故に威光を失ひ、利生<sup>りしやう</sup>を止め、此の国をすて他方に去り給ひ、悪鬼<sup>たよ</sup>は便り<sup>けかち</sup>を得て国中に入り替はり、大地を動かし悪風を興し、一天を悩まし五穀を損ず。故に飢渴出来し、人の五根には鬼神入りて精気を奪ふ。是を疫病<sup>やくびやう</sup>と名づく。一切の諸人善心無く多分は悪道に墮することひとへに悪知識の教を信ずる故なり。仁王經に云はく「諸の悪比丘多く名利を求め、国王・太子・王子の前に於て自ら破仏法の因縁・破国の因縁を説かん。其の王別<sup>わきま</sup>へずして此の語を信聴し、横<sup>よこしま</sup>に法制を作りて仏戒に依らず、是を破仏・破国の因縁と為す」文。文の心は末法の諸の悪比丘、国王・大臣の御前にして、国を安穩ならしむる様にして終に国を損じ、仏法を弘むる様にして還つて仏法を失ふべし。国王・大臣此の由を深く知ろし食さずして此の言を信受する故に、国を破り仏教を失ふと云ふ文なり。此の時日月度を失ひ、時節もたがひて、夏はさむく、冬はあたゝかに、秋は悪風吹き、赤き日月出で、望朔<sup>ぼうさく</sup>にあらずして日月蝕し、或は二つ三つ等の日出来せん。大火・大風・彗星等をこり、飢饉<sup>ききん</sup>・疫病<sup>やくびやう</sup>等あらんと見えたり。国を損じ人を悪道におとす者は悪知識に過ぎたる事なきか。

問うて云はく、始めに智者の御物語とて申しつるは、所詮<sup>しよせん</sup>後世の事の疑はしき故に善悪を申して承らんためなり。彼の義等は恐ろしき事にあるにこそ侍るなれ。一文不通の我等が如くなる者はいかにしてか法華經に信をとり候べき。又心ねをば何様に思ひ定め侍らん。答へて云はく、此の身の申す事をも一定<sup>いちじやう</sup>とおぼしめさるまじきにや。其の故はかやうに申すも天魔破旬<sup>はじゆん</sup>・悪鬼等の身に入って、人の善き法門を破りやすらんとおぼしめされ候はん。一切は賢きが智者にて侍るにや。

問うて云はく、若しかやうに疑ひ候はゞ、我が身は愚者にて侍り、万<sup>よろず</sup>の智者の御語をば疑ひ、さて信ずる方も無くして空しく一期過ごし侍るべきにや。答へて云はく、仏の遺言<sup>えいごん</sup>に依法不依人と説かせ給ひて候へば、經の如くに説かざるをば、何にいみじき人なりとも御信用あるべからず候か。又依了義經<sup>えりやうぎきやう</sup>・不依不了義經<sup>ふえふりやうぎきやう</sup>と説かれて候へば、愚癡の身にして一代聖教の前後浅深を弁<sup>わきま</sup>へざらん程は了義經に付かせ給ひ候へ。了義經・不了義經も多く候。阿含小乘經は不了義經、華嚴・方等・般若・淨土の觀經等は了義經。又四十余年の諸經を法華經に対すれば不了義經、法華經は了義經。涅槃經を法華經に対すれば、法華經は了義經、涅槃經は不了義經。大日經を法華經に対すれば、大日經は不了義經、法華經は了義經なり。故に四十余年の諸經並びに涅槃經を打ち捨てさせ給ひて、法華經を師匠<sup>たの</sup>と御憑み候へ。法華經をば国王・父母・日月・大海・須弥山・天地の如くおぼしめせ。諸經をば閼白<sup>くぎやう</sup>・大臣・公卿・乃至万民・衆星・江河・諸山・草木等の如くおぼしめすべし。我等が身は末代造悪の愚者・鈍者・非法器の者、国王は臣下よりも人をたすくる人、父母は他人よりも子をあはれむ者、日月は衆星より暗<sup>やみ</sup>を照らす者、法華經は機<sup>かな</sup>に叶はずんば況んや余經は助け難しとおぼしめせ。又釈迦如来と阿弥陀如来・薬師如来・多宝仏・觀音・勢至・普賢・文殊等の一切の諸仏菩薩は我等が慈悲の父母、此の仏菩薩の衆生を教化する慈悲の極理は唯法華經にのみとゞまれりとおぼしめ

せ。諸経は悪人・愚者・鈍者・女人・根欠等こんけつの者を救ふ秘術をば未だ説き顯はさずとおぼしめせ。法華経の一切経に勝れ候故は但此の事に侍りはべ。而るを当世の学者、法華経をば一切経に勝れたりと讃めて、而も末代の機に叶はずと申すを皆信ずる事豈謗法の人に侍らずや。只一口におぼしめし切らせ給ひ候へ。所詮法華経の文字を破りさきなんどせんには法華経の心やぶるべからず。又世間の悪業に対して云ひうとむるとも、人々用ゆべからず。只相似ただあいにたる権経の義理を以て云ひうとむるにこそ、人はたばらかさるれとおぼしめすべし。

問うて云はく、或智者あるの申され候ひしは、四十余年の諸経と八箇年の法華経とは、成仏の方こそ爾前は難行道、法華経は易行道にて候へ。往生の方にては同事にして易行道に侍り。法華経を書き読みても十方の浄土阿弥陀仏の国へも生まるべし。観経等の諸経あらそに付いて弥陀の名号を唱へん人も往生を遂ぐべし。只機縁の有無に随つて何をも争ふべからず。但し弥陀の名号は人ごとに行じ易しと思ひて、日本国中に行じつけたる事なれば、法華経等の余行よぎょうよりも易きにこそと申されしは如何。答へて云はく、仰せの法門はさも侍らん。又世間の人も多くは道理と思ひたりげに侍り。但し身には此の義に不審あり。其の故は前に申せしが如く、末代の凡夫は智者と云ふともたのみなし、世こそりて上代の智者には及ぶべからざるが故に。愚者と申すともいやしむべからず、経論の証文けんねん顯然ならんには、抑そもそも無量義経は法華経を説かんが為の序分なり。然るに始め寂滅道場じゃくめつどうじょうより今の常在靈山じょうざいりょうぜんの無量義経に至るまで、其の年月日数を委しく計へ挙げれば四十余年なり。其の間の所説の経を挙ぐるに華嚴・阿含・方等・般若なり。所談の法門は三乗五乗所習の法門なり。修行の時節を定むるには宣説菩薩歴劫修行と云ひ、随自意・随他意を分かつには是を随他意と宣べ、四十余年の諸経と八箇年の所説との語同じく義替かはれる事を定むるには「文辞もんじ一なりと雖も義各異おのおのなり」ととけり。成仏の方は別にして往生の方は一つなるべしともおぼえず。華嚴・方等・般若・究竟くきょう最上の大乘経、頓悟・漸悟の法門、皆未顯真実と説かれたり。此の大部の諸経すら未顯真実なり。何に況んや浄土の三部経等の往生極楽ばかり未顯真実の内にもれんや。其上経々ばかりを出だすのみにあらず、既に年月日数を出だすをや。然れば、華嚴・方等・般若等の弥陀往生已に未顯真実なる事疑ひ無し。観経の弥陀往生に限つて豈多留難故あにたるなんこの内に入らざらんや。若し随自意の法華経の往生極楽を随他意の観経の往生極楽に同じて易行道と定めて、而も易行の中に取りても猶観経等の念仏往生は易行なりと之を立てらるれば、権実そうらん雑乱とがの失大謗法たる上、一滴の水漸々に流れて大海となり、一塵積もりて須弥山しゅみせんとなるが如く、漸くようや権経の人も実経にすゝまず、実経の人も権経におち、権経の人次第たましいに国中に充満せば法華経随喜の心も留まり、国中に王なきが如く、人の神を失へるが如く、法華・真言の諸の山寺荒れて、諸天善神・竜神等一切の聖人国を捨て去れば、悪鬼たよ便りを得て乱れ入り、悪風吹いて五穀こくも成らしめず、疫病やくびょう流行して人民をや亡ぼさんずらん。此の七八年が前までは諸行は永く往生すべからず、善導和尚の千中無一と定めさせ給ひたる上、選択せんちゃくには諸行を抛なげうてよ、行ずる者は群賊ぐんぞくと見えたりなど放語

を申し立てしが、又此の四五年の後は選択集の如く人を勧めん者は、謗法の罪によって師檀共に無間地獄に墮つべしと経にみえたりと申す法門出来したりげに有りしを、始めは念仏者こそぞりて不思議の思ひをなす上、念仏を申す者無間地獄に墮つべしと申す悪人外道あり、なんどのゝしり候ひしが、念仏者無間地獄に墮つべしと申す語に智慧つきて、各選択集を委く披見する程に、げにも謗法の書とや見なしけん、千中無一の悪義を留めて、諸行往生の由を念仏者毎に之を立つ。然りと雖も唯口にのみゆるして、心の中は猶本の千中無一の思ひなり。在家の愚人は内心の謗法なるをばしらずして、諸行往生の口にばかされて、念仏者は法華経をば謗ぜざりけるを、法華経を謗ずる由を聖道門の人の申されしは僻事なりと思へるにや。一向諸行は千中無一と申す人よりも謗法の心はまさりて候なり。失なき由を人に知らせて而も念仏計りを亦弘めんとたばかりなり。偏に天魔の計りごとなり。

問うて云はく、天台宗の中の人立つる事あり、天台大師、爾前と法華と相對して爾前を嫌ふに二義あり。一には約部、四十余年の部と法華経の部と相對して爾前は麁なり、法華は妙なりと之を立つ。二には約教、教に麁妙を立て、華嚴・方等・般若等の円頓速疾の法門をば妙と歎じ、華嚴・方等・般若等の三乘歴別の修行の法門をば前三教と名づけて麁なりと嫌へり。円頓速疾の方をば嫌はず、法華経に同じて一味の法門とせりと申すは如何。答へて云はく、此の事は不審にもする事侍らん。然るべしとをばゆ。天台・妙楽より已来今に論有る事に侍り。天台の三大部六十卷、総じて五大部の章疏の中にも、約教の時は爾前の円を嫌ふ文無し。只約部の時ばかり爾前の円を押しふさねて嫌へり。日本に二義あり。園城寺には智証大師の釈より起こりて爾前の円を嫌ふと云ひ、山門には嫌はずと云ふ。互ひに文釈あり、俱に料簡あり。然れども今に事ゆかず。但し予が流の義には不審晴れておぼえ候。其の故は天台大師、四教を立て給ふに四つの筋目あり。一には爾前の経に四教を立つ、二には法華経と爾前と相對して、爾前の円を法華の円に同じて前三教を嫌ふ事あり、三には爾前の円をば別教に撰して前三教を嫌ひ、法華の円をば純円と立つ、四には爾前の円をば法華に同ずれども、但法華経の二妙の中の相待妙に同じて絶対妙には同ぜず。此の四の道理を相對して六十卷をかんがうれば狐疑の氷解けたり。一々の証文は且つは秘し、且つは繁き故に之を載せず。又法華経の本門にしては爾前の円と迹門の円とを嫌ふ事不審なき者なり。爾前の円をば別教に撰して、約教の時は「前三を麁と為し、後一を妙と為す」と云ふなり。此の時は爾前の円は無量義経の歴劫修行の内に入りぬ。又伝教大師の註釈の中に、爾前の八教を挙げて四十余年未顕眞実の内に入れ、或は前三教をば迂回と立て、爾前の円をば直道と云ひ、无量義経をば大直道と云ふ。委細に見るべし。

問うて云はく、法華経を信ぜん人は本尊並びに行儀並びに常の所行は何にてか候べき。答へて云はく、第一に本尊は法華経八卷・一卷・一品、或は題目を書きて本尊と定むべしと、法師品並びに神力品に見えたり。又たへたらん人は釈迦如来・多宝仏を書きても造りても法華経の左右に之を立て奉るべし。又たへたらんは十方の諸仏・普賢菩薩等を

もつくりかきたてまつるべし。行儀は本尊の御前にて必ず坐立行なるべし。道場を出  
では行住坐臥をゑらぶべからず。常の所行は題目を南無妙法蓮華經と唱ふべし。た  
へたらん人は一偈一句をも読み奉るべし。助縁には南無釈迦牟尼仏・多宝仏・十方諸仏  
・一切の諸菩薩・二乗・天人・竜神・八部等心に随ふべし。愚者多き世となれば一念三  
千の觀を先とせず、其の志あらん人は必ず習学して之を觀ずべし。

問うて云はく、只題目計りを唱ふる功德如何。答へて云はく、釈迦如来、法華經を説  
かんとおぼしめして世に出でましまししかども、四十余年の程は法華經の御名を秘しお  
ぼしめして、御年三十の比より七十余に至るまで法華經の方便をまうけ、七十二にして  
始めて題目を呼び出ださせ給へば、諸經の題目に是を比ぶべからず。其の上、法華經の  
肝心たる方便・寿量の一念三千・久遠実成の法門は妙法の二字におさまれり。天台大師  
玄義十卷を造り給ふ。第一の卷には略して妙法蓮華經の五字の意を宣へ給ふ、第二の卷  
より七の卷に至るまでは又広く妙の一字を宣へ、八の卷より九の卷に至るまでは法蓮華  
の三字を釈し、第十の卷には經の一字を宣へ給へり。經の一字に華嚴・阿含・方等・般  
若・涅槃經を収めたり。妙法の二字は玄義の心は百界千如・心仏衆生の法門なり。止觀  
十卷の心は一念三千・百界千如・三千世間・心仏衆生三無差別と立て給ふ。一切の諸仏  
・菩薩。十界の因果・十方の草木瓦礫等妙法の二字にあらずと云ふ事なし。華嚴・阿  
含等の四十余年の経々、小乘經の題目には大乘經の功德を収めず、又大乘經にも往生を  
説く經の題目には成仏の功德を収めず、又王にては有れども王中の王にて無き經も有り。  
仏も又經に随つて他仏の功德をおさめず、平等意趣をもつて他仏自仏とをなじといひ、  
或は法身平等をもつて自仏他仏同じといふ。實には一仏に一切仏の功德をおさめず、今法  
華經は四十余年の諸經を一經に収めて、十方世界の三身円満の諸仏をあつめて、釈迦一  
仏の分身の諸仏と談ずる故に、一仏一切仏にして妙法の二字に諸仏皆収まれり。故に妙  
法蓮華經の五字を唱ふる功德莫大なり。諸仏諸經の題目は法華經の所開なり、妙法は能開  
なりとしりて法華經の題目を唱ふべし。

問うて云はく、此の法門を承けて又智者に尋ね申し候へば、法華經のいみじき事は左  
右に及ばず候。但し器量ならん人は唯我が身計りは然るべし。末代の凡夫に向かつて、  
たゞちに機をも知らず、爾前の教を云ひうとめ、法華經を行ぜよと申すは、としごろの  
念仏などをば打ち捨て、又法華經には未だ功も入れず、有にも無にもつかぬやうにて  
あらんずらん。又機もしらず、法華經を説かせ給はゞ、信ずる者は左右に及ばず、若し  
謗する者あらば定めて地獄に墮ち候はんずらん。其の上、仏も四十余年の間、法華經を  
説き給はざる事は「若但讚仏乘衆生没在苦」の故なりと。在世の機すら猶然なり。  
何に況んや末代の凡夫をや。されば譬喩品には「仏舍利弗に告げて言はく、無智の人  
の中に此の經を説くことなかれ」云云。此等の道理を申すは如何が候べき。答へて云は  
く、智者の御物語と仰せ承り候へば、所詮末代の凡夫には機をかゞみて説け、左右なく  
説いて人に謗せさする事なかれとこそ候なれ。彼の人さやうに申され候はゞ、御返事候  
べきやうは、抑「若但讚仏乘乃至無智人中」等の文を出だし給はゞ、又一經の内に「凡

有所見、我深敬汝等」等と説いて、不輕菩薩の杖木瓦石をもつてうちはられさせ給ひしをば顧みさせ給はざりしは如何と申させ給へ。

問うて云はく、一經の内に相違の候なる事こそ、よに心得がたく侍れば、くはしく承り候はん。答へて云はく、方便品等には機をかゞみて此の經を説くべしと見え、不輕品には謗ずとも唯強ひて之を説くべしと見え侍り。一經の前後水火の如し。然るを天台大師会して云はく「本已に善有り、釈迦は小を以て之を將護し、本未だ善有らず、不輕は大を以て之を強毒す」文。文の心は本善根ありて今生の内に得解すべき者の為には直に法華經を説くべし。然るに其の中に猶聞いて謗すべき機あらば暫く權經をもてこしらへて後に法華經を説くべし。本大の善根もなく、今も法華經を信ずべからず、なにとなくとも惡道に墮ちぬべき故に、但押し法華經を説いて之を謗せしめて逆縁ともなせと會する文なり。此の釈の如きは、末代には善無き者は多く善有る者は少なし。故に惡道に墮せん事疑ひ無し。同じくは法華經を強ひて説き聞かせて毒鼓の縁と成すべきか。然れば法華經を説いて謗縁を結ぶべき時節なる事諍ひ無き者をや。又法華經の方便品に五千の上慢あり、略開三顯一を聞いて広開三顯一の時、仏の御力をもて座をたゞしめ給ふ。後に涅槃經並びに四依の辺にして今生に悟りを得せしめ給ふと、諸法無行經に、喜根菩薩、勝意比丘に向かつて大乘の法門を強ひて説ききかせ謗せさせしと、此の二つの相違をば天台大師会して云はく「如来は悲を以ての故に発遣し、喜根は慈を以ての故に強説す」文。文の心は仏は悲の故に後のたのしみをば闇きて、当時法華經を謗じて地獄にをちて苦にあうべきを悲しみ給ひて、座をたゞしめ給ひき。譬へば母の子に病あると知れども、当時の苦を悲しみて左右なく灸を加へざるが如し。喜根菩薩は慈の故に当時の苦をばかへりみず、後の樂を思ひて強ひて之を説き聞かしむ。譬へば父は慈の故に子に病あるを見て、当時の苦をかへりみず、後を思ふ故に灸を加ふるが如し。又仏在世には仏法華經を秘し給ひしかば、四十余年の間は等覺・不退の菩薩、名をしらず。其の上寿量品は法華經八箇年の内にも名を秘し給ひて最後にきかしめ給ひき。末代の凡夫には左右なく如何がきかしむべきとおぼゆる處を、妙樂大師釈して云はく「仏世は當機の故に簡ぶ、末代は結縁の故に聞かしむ」と釈し給へり。文の心は仏在世には仏一期の間、多くの人不退の位にのぼりぬべき故に法華經の名義を出だして謗せしめず、機をこしらへて之を説く。仏滅後には當機の衆は少なく結縁の衆多きが故に、多分に就いて左右なく法華經を説くべしと云ふ文なり。是体の多くの品あり。又末代の師は多くは機を知らず。機を知らざらんには強ひて但実教を説くべきか。されば天台大師の釈に云はく「等しく是見ざらんは、但大を説くに咎無し」文。文の心は機をも知らざれば大を説くに失なしと云ふ文なり。又時の機を見て説法する方もあり。皆国中の諸人權經を信じて実經を謗じ強ちに用ひざれば、彈呵の心をもて説くべきか。時に依って用否あるべし。

問うて云はく、唐土の人師の中に、一分一向に權大乘に留まりて実經に入らざる者はいかなる故か候。答へて云はく、仏世に出でましまして先ず四十余年の權大乘・小乗の

經を説き、後には法華經を説いて言はく「若以にやくいししょうじょうけ小乘化乃至於一人、我則墮慳貪、  
此事為不可」文。文の心は、仏但爾前の經計りを説いて法華經を説き給はずば、けんどん仏慳貪  
の失ありと説かれたり。後に囑累品にいたりて、仏右の御手をのべて三たび諫めをなし  
て、三千大千世界の外八方四百万億那由他の国土の諸菩薩の頂いただきをなでて、未来には必  
ず法華經を説くべし。若し機たへずば、余の深法の四十余年の經を説いて機をこしらへ  
て法華經を説くべしと見えたり。後に涅槃經に重ねて此の事を説いて、終仏滅後に四依の  
菩薩ありて法を説くに又法の四依あり。実經をつひに弘めずんば天魔とするべきよしを  
説かれたり。故に如来の滅後、後の五百年、九百年の間に出で給ひし竜樹菩薩・天親菩  
薩等、あまね遍く如来の聖教を弘め給ふに、天親菩薩は先に小乗の説一切有部の人、俱舍論  
を造りて阿含十二年の經の心を宣べて一向に大乘の義理を明かさず、次に十地論・撰  
大乘論・釈論等を造りて四十余年の権大乘の心を宣べ、後に仏性論・法華論等を造り  
て粗実大乘の義を宣べたり。竜樹菩薩も亦然なり。天台大師、唐土の人師として一代を  
分かつに大小・権実けんねん顕然なり。余の人師は僅かに義理を説けども分明ならず、又証文  
たしかならず。但し末の論師並びに訳者、唐土の人師の中に大小をば分けて大にをいて  
権実を分かつたず、或は語には分かつといへども心は権大乘のをもむきを出でず、此等は  
「不退諸菩薩、其数如恒沙、亦復不能知」とおぼえて候なり。

疑って云はく、唐土の人師の中に慈恩大師は十一面觀音の化身、きば牙より光を放つ。善  
導和尚は弥陀の化身、口より仏をいだす。この外の人師、通を現じ徳をほどこし三昧を  
發得する人世に多し。なんぞ権実二經を弁わかまへて法華經を詮とせざるや。答へて云はく、  
阿竭多仙人外道は十二年の間耳の中に恒河の水をとゞむ。婆藪仙人は自在天となりて三  
目を現ず。唐土の道士の中にも張階は霧をいだし、鸞巴は雲をはく。第六天の魔王は  
仏滅後に比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷・阿羅漢・辟支仏の形を現じて四十余年の經  
を説くべしと見えたり。通力をもて智者愚者をばしるべからざるか。唯仏の遺言の如く、  
一向に権經を弘めて実經をつみに弘めざる人師は、権經に宿習しゆくじゅうありて実經に入らざら  
ん者は、或は魔にたぼらかされて通を現ざるか。但し法門をもて邪正をたゞすべし。利  
根と通力とにはよるべからず。

文應元年太歲庚申五月二十八日

日 蓮 花 押

鎌倉名越なごえに於て書き畢おわんぬ。